

社会保障論評26-006号 (作成日: 2026年4月6日)

「ベーシック・インカムの本質」

- AIの進展により失われる職が増えて労働の概念が変わり得ることにたいして、人間の生存のためにはベーシック・インカム (BI) が必要であるという声が大きくなっている一方、財源や労働倫理観の観点から否定的な意見も少なくない。議論は混迷の状況と言えよう。
- そんな中、財源問題に対して、「通貨発行権」を国民の権利として位置づけるという考え方が浮上している。初めは何の事か理解できなかったが、どうやら、国民の権利とすることで、BIに必要な財源はお札を刷って賄えばいい、というMMT理論に近いようである。
- そんな事をすれば、結局お札の価値が下落してインフレになるのではないか、という意見に対しては、楽観的な向きが多いようであるし、経済的な鎖国を行って貨幣価値を守ればいいという暴論まで出てきている。この状況は、BIを推進する上では、有害なものとなる。
- そこで、BI思想の原点に戻って考えてみたい。日本を100人の村に例えよう。現時点の人口構成だと、15歳未満人口11人、15—65歳 (生産) 人口60人、65歳以上29人となる。この村の生産物は生存に必要な米で、それを生産人口が産出しているものとしてみよう。
- この村の総人口100人の食い扶持を満たすには、60人で100人分の米を生産する必要があるから、生産人口一人当たりの必要生産額は1.67 ($=100/60$) 人分である。これを下回れば、村全体の食い扶持を賄うことができない。そのため、水子や姥捨の悲劇が生まれる。
- したがって、BIの概念が成立するためには、村全体で食い扶持が賄われ得る必要がある。すなわち。豊かな国においてしか、成立しない考え方なのである。AIの進展がBIの概念につながるのはこの点にあり、AIによって一人当たりの生産額が向上するのが前提である。
- では、労働倫理の観点から見ると、どうなるだろうか。生産者は、年少者と高齢者の食い扶持を負担している。もし、「働かざる者、食うべからず」という価値観を持ち出せば、年少者と高齢者は排除されるしかなくなる。だが、そうすると、村はどうなるだろうか。
- 未来の生産者の年少者がおらず、いずれ高齢者となる生産者の老後を支える者がいなければ、この村は消滅するしかなくなる。すなわち「働かざる者、食うべからず」という価値観では、村は維持できないのである。まず、この点を明確に意識することが必要である。
- 生産者で男女を区別しなかったが、女性だけが将来のための子どもを産むことができる。そのための出産および夫婦による育児の期間や費用は、他の生産者全体で負担する必要がある。病気になる期間もあるかもしれない。そのための助け合いは村として必須である。
- この状態で、AI革命によって、60人のうち20人の生産額が3倍になったとしよう。すると、村全体では、20人の生産物で食い扶持が賄われる。だが、この20人が自分の生産物は自分のものだと主張すれば、残る80人は飢えに苦しむことになって、村は存続できない。
- BIの概念の背景は、少なくとも村全体に必須な生産物は村人全員に配分した上で、余剰生産物については生産者の利益とするということであろう。豊かな国の中で、国民全員に必要な生産物を配分しない強欲な者を容認しては、国は存続できないことになる。(以上)